



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	経験的文学研究の現状と課題：札幌圏における実態調査の報告
Author(s)	石原, 次郎; ISHIHARA, Jiro; 名執, 基樹 他
Citation	独語独文学科研究年報, 23, 73-91
Issue Date	1996-12
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/26048">https://hdl.handle.net/2115/26048</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	23_P73-91.pdf



**経験的文学研究の現状と課題**  
**—札幌圏における実態調査の報告—**

石原次郎、名執基樹、中瀬勝美、  
岡田麻子、前原真吾、小川了

**1. 序言**

書くことだけが作家ではない。書くこととその他の様々な社会的要因（メディア機構、批評、文学交流、文化支援、教育環境など）とのからみの中で文化の生産者としての作家のありかたが決まってくる。その構造を経験的に捉えること、これがこの研究のねらいである。

具体的に私たちのアンケート調査の報告に入る前に、まず、こうした調査のもととなった関心とここの研究の観点について、とりわけ私たちが意識したドイツの経験的文学研究などでの議論にも触れつつ、簡単に説明しておきたい。

では、なぜ「書くことだけが作家ではない」という点を強調する必要があるのか？

理由は2つある。まず一つめは作家という活動の社会的・歴史的な側面にかかわる。近代以降、文化は単に維持されるものから、社会によって作られるものとしての性格をますます帯びるようになってきた。作家という概念もこの変化の中で文化の作り手を表すものとして社会に定着してきた。出版活動の発展や読書層の拡大、具体的にはこうした動きと連動しつつ今日的な意味での作家のありかたは作られてきたのである。さらに20世紀に入り、文化産業の構図が指摘されるようになると、作家はメディアの生産プロセスの中に置かれた一社会的存在であることが強く意識されるようになる。近年ではこの文化の産業化の動きを補うような形で、企業や公的機関などによる文化支援の動きなども出てきている。つまり、作家活動は単に机上の個人の行為としてではなく、メディア産業や文化支援などのかかわりも含め、多様な社会的要因との影響関係の中で社会的に営まれているのである。

もう一つの理由は文学理論上のものである。これまでの理論の多くは個別の文学的・美学的立場から書かれたものでしかなかった。つまり、逆に言うなら、現実の作家活動の多様性に対し、きわめて狭い切り口しか提示できなかったのである。実際、作家活動の実態に目を向けると、表現形式や文学観、活動の意義づけや生活の中への位置づけ（生業か余暇か）など、実に様々な立場が共存していて一筋縄では捉えきれないことが分かる。こうした問題を克服するためには、そうした差異を生んでいく構造そのもの、つまり、個々の活動形態を選ぶ作家の「選択のプロセス」をも問えるような視点が必要になってくる。この意味からも、作家と作家を作家たらしめている様々な要因との関係の分析へ視野を拡大する必要が出てくる。

さて、ドイツの経験的文学研究や文学の社会史の研究はこうした視野の拡大をいち早く試みてきた。その際に中心的な役割をになってきたのが文学システム概念である。一言でいうなら、文学システムとは、文学を創作や出版や受容や批評などの活動によって動的に織りなされる社会的現象の一

つと捉えようとするものである。この概念自体はこうした動向の中で定着した観がある。しかしその理論的な内容については未だ議論が分かれているのが実状である。特に80年代の後半からはルーマンの社会システム論をめぐる意見の対立もこの議論の中に入り込んできている。しかし、より深刻に思われるのは、そこでの抽象度の高い議論がなかなか実際の調査に結びついていない現実である<sup>1)</sup>。

私たちはこうしたなかで、すでにドイツの研究者からも指摘されているように<sup>2)</sup>、文学システムの概念を経験的調査に開かれたものにしてゆく必要があると考えた。この調査はその第一歩でもある。そのためにはこれまでの議論で出た幾つかの問題点に対しても特定の答えを用意しておく必要がある。以下、3点に分けて、この研究で私たちが選んだ観点について述べておきたい。

### 1-1 文学システム概念の導入

すでに述べたように経験的文学研究などでは、文学現象の全体像を捉えるための概念として文学システムの概念を提案してきた。最初の選択は私たちの作家への経験的調査にこの文学システムの概念を取り入れる事である。まず、シュミットの捉え方をもとに文学システムの概念についてもう少し具体的に紹介しておきたい。シュミットは、文学システムは「文学」というある種のコミュニケーション・モードに従った活動によって構成されていると捉える。すなわち、このモードの下にテキストの生産（執筆）、媒介（出版・上演）、受容（読書）、加工（批評・翻訳）の諸活動が行われる。そして、これらの活動が互いに連鎖し、影響を及ぼし合うことで文学システムという社会現象が展開されると見るのである<sup>3)</sup>。後に述べるように、この把握は実際の文学現象の複合性に対してかなり単純なものと言える。しかし、文学現象の基本要因をコミュニケーション・モードと捉え、それをもとに生産、媒介などの中核構造を指摘できる点で、経験的調査の出発点を明らかにしてくれる意義を持つ。例えば、作家活動そのものは副業や趣味としても行われている。そこで、作家は職業としてはなく、むしろ、文学というコミュニケーション・モードをもとに創作活動をする存在と捉えたほうが説明力がある。私たちの調査においても調査対象である作家の選択に際しては、実際に「文学」として作品を公表しているか否かが基準となった。また、作家が影響を受ける可能性がある他の幾つかの重要な活動を予め理論的に予想し、調査項目に盛り込めるという利点もそこにはある（テキストの出版、受容、批評に関わる活動など）。

### 1-2 複合的システムとしての文学システム

しかし、文学現象は一つのコミュニケーション・モードでは覆いきれない複雑性も持っている。出版と読者との関係は主に書籍市場によって媒介されているし、作家の文学交流（同人、文壇）などをどこに位置づけるかという問題もそこにはある。したがって、ルッシュは文学というコミュニケーション・モードは文学現象のための要因の一つでしかなく、実際の文学活動は社会のさまざまな組織や領域の中に分散化している、と見る<sup>4)</sup>。しかし、完全に社会の中に分散化しているかという点、そうでもない。当然のことだが、地域的、時間的に離れていても、作られた作品を読み、批評したり影

響を受けたりする事は可能である。文学というコミュニケーション・モードは、一見分散化しているかに見える活動に、いわば共通の舞台を与え、システムとしての現象の関連性を約束するのである。したがって、ルーマンは、むしろ逆にそうしたコミュニケーションの様態を理論の中心に据える。そもそも、個々の組織や社会関係を貫いて全社会的に通用しているということが、芸術や経済などの社会システムの特徴である。そこで、社会システムをコミュニケーション・システムとして捉え、それを取りまく他の社会的要因との関係をシステムとシステムの環境との関係とみなすことで、社会現象の複雑性の問題に答えるという理論戦略をルーマンは取るのである<sup>5)</sup>。ルッシュが文学研究者として社会環境の中で具体的に成立している文学活動に目を向けようとしているのに対し、社会理論家ルーマンは社会を貫く基本的な社会性としてあくまで抽象的なコミュニケーションの次元にこだわる。システムの根幹にいかにかコミュニケーション・モードがかかわっているかを理解する上でルーマンの考察はきわめて示唆に富む。しかし、文学研究者として私たちが関心を寄せるのは、ルーマンの言う「社会システム」ではなく、ルッシュの場合のような文学活動の実態である。ウォーラーsteinは『脱=社会学』の中でちょうどこのルーマンに代表される「社会学」主義的なアプローチの問題を指摘し、むしろ、社会現象を「史的システム」と捉える観点をすすめている。つまり、個々の歴史、個々の地域のなかで具体的に展開されている複合的なプロセスをシステムとして捉え、そのなかで中・長期的に成立している構造を探って行こうというのである<sup>6)</sup>。例えば、デビューのための装置としての文学賞というような構造を考えてみるといい。文学の活動は全くランダムに社会の中に紛れ込んでいるのではなく、そこには文学の営みに骨格を与える、比較的安定化し、定着化したプロセスが見られる。具体的には、この研究で私たちはアンケート調査を通じて統計的に見て作家がどのような社会的要因とどのような強度で関わっているかを分析し、そこから見えてくる関連の構図を「経験的に捉えうな文学システム」とみなして考察していこうと考えた。そして他方で、安定化や定着化の観点からは捉えきれないシステムのいわゆる「ゆらぎ」については、聞き取り調査などを通じて追っていくと計画したのである。

### 1-3 作家と文学システム

システムの複合性とならんで、これまで意見が分かれて来たのはシステムと個人との関係である。ルーマンの理論では個人、すなわち意識システムはむしろ社会システムの環境として位置づけられる。しかし、複合的システムとして文学を捉えた場合、個人もまたシステムの重要な要因として把握し直される必要がでてくる。すでに触れたように作家の執筆活動は様々な要因との関係の中で成立する。作家は書くだけでなく、書くための刺激や文学への考察、批判などを受け取るチャンネルを備えており、そうした領域での体験を執筆に持ち込みつつ、文学活動を営む。生計のような規制的要因についても同じことが言える。例えば経済的理由から作家が売れるジャンルへの移行を選ぶというような場合、生活状況は作家という媒介項を通して執筆のありかたに影響を与えることになる。つまり、

作家は狭義の文学活動にその他の活動の影響を持ち込むプロセスの交点として、文学の複合構造を考える上で無視できないのである<sup>7)</sup>。文学は単純な記号プロセスではない。美学的にも社会的にも多くの非特定性を持つ文学という活動が実際に展開されうるものになるためには、それを生活の中に位置づけたり、それに美学的方向づけを与えたりする作家という「文学を営む者」の複合的なメカニズムがどうしても必要となるのである。この際鍵となるのが、個々の作家が持つ「作家としてのアイデンティティ構成」である。作家のアイデンティティは文学現象との関係の中ではぐくまれるものであるが、他方で、そのアイデンティティとの関係で、作家がどのような要因とどう関係し、どのようなシーンに居場所を求めるとも決まってくる。アイデンティティ構成のありかたが作家の関係要因の具体的な統合原理をなしているのである<sup>8)</sup>。ここから、作家と文学システムとの関係を追う上では次の2つの点が問題となる。一つは、文学システムの構造に対し作家が持つ関係である。作家は単に複雑なプロセスの交点であるだけでなく、作家としての自己了解をもとに選択的にシステムにかかわることで、システムの分散性にも荷担する。したがって、作家の属性と多様に構成され展開されている文学のシーンとの関係についての問いがここから浮かんでくる。もう一つは、逆に文学システムが作家のアイデンティティ構成に対し持つ意味である。教育や親近者からの刺激、文学交流、メディア、出版や批評を通しての成功・不成功の体験など、さまざまな形で文学現象との接触が作家のアイデンティティ構成にはかかわる。そうした作家を生みだす土壌と作家との関係について調査で仮説が得られるならば、文学現象そのものの再生産の構造も見えてくる。そこで、私たちは調査の分析に当たって、作家の個人の構造にかかわるミクロ要因（文学観、自己把握、執筆の生活内への位置づけなど）と活動の社会的関係にかかわるマクロ要因（メディア、同人、教育など）とを区別してみた。そして、ミクロレベルでの要因相互の関係からアイデンティティ構成のおおまかな特徴を、マクロレベルでの要因関係から文学システムの構造を、そして、ミクロ・マクロの相互の関係から属性とシステム構造の関係ならびに作家の属性とその形成要因との関係を分析しようと考えたのである。

（文責：名執）

## 2. アンケート調査の概略

この報告のもとになるアンケート調査は、1995年2月に実施された。アンケートの対象者は、札幌およびその近郊（以下、札幌圏と略称）に在住する、何らかのかたちで文学活動に関わりのある者で、項目選択、および記述による合計77項目のアンケート用紙を、375通発送した。対象者は、「文芸年鑑」1994年版<sup>9)</sup>、「札幌芸術文化年鑑」1990年版から1994年版<sup>10)</sup>に収録されている名簿から、短歌・俳句に関わる団体以外のすべての個人および団体を抽出したものである。

アンケート項目の作成にあたっては、H. Funk/G.R. Wittmannによって実施されたベルリン在住の作家を対象としたアンケート<sup>11)</sup>を下敷きにして、概ねその内容に従っている。これは主に、比較対照研究を容易にするためである。また、この度のアンケート調査の実施地域が札幌圏に限られたのは、理

論上の理由によるものではない。むしろ、地域を職業的な作家が極端に少ない札幌圏に限定することは、我々には大きな悩みとなっていた。が、我々のチームが北海道大学を活動の基盤としている点、また首都圏での調査にはぜひとも必要な経済的な基盤に欠けていた点が、我々の調査地域を札幌圏に限定することに至ったのである。

発送された375通のうち、回収されたのは224通、回収率は59.7%だった。うち、有効回答と認められたのは211通である。従って実質回収率は56.3%である。

回答者のうち、主に文筆活動によって生計を立てていると答えたのはわずかに13名(6.2%)。予想していたとはいえ、極めて少数であった。他の194名(93.8%)は、副業として文学に携わるか、あるいは(これが圧倒的多数であるが)金銭収入とは関わりのない活動を行っている者である。回答総数のうち、いわゆる同人などの文学団体に所属している者は174名(82.5%)、個人で活動している者は37名(17.5%)という結果となった。

回答者の性別は、男性107名(50.7%)、女性104名(49.3%)で、ほぼ同率である。

世代別の区分を設定した分析は放棄した。その理由は、回答者を抽出した文献が、おもにすでに長期的な活動を行っている個人、および団体に限られていることが明白であり、大学などを拠点にして新しく活動を始めている団体などが我々の調査対象から漏れてしまったためである。文献に登録されていない個人、団体などの問い合わせ先は、それなりの調査によって判明するのだが、今回はプライバシーの保護という観点から、公表されている住所以外への調査依頼は一切断念した。

アンケート項目は、先に述べたとおり77項目におよぶ膨大なものになったのだが、これをすべて参照して分析を行うのはいくつかの理由から不可能であった。最大の理由は、我々のチームにとってアンケート調査が初めての試みであり、回収した後でいくつかの項目に不備を見いだした点にある。これは、今後の反省点として考えている。また第二の大きな理由は、項目によっては回答数があまりに少なく、データとしての信頼度に著しく欠けている点である。このため、例えば職業別の区分による分析といった、興味深い作業は割愛せざるをえなくなった。

こうした諸問題を抱えながらも、ここに提示する分析結果は、それが事実上日本における文筆家の実態調査の、事実上最初の大がかりなものであることから、ある程度満足のいくものだと確信している。  
(文責：石原)

### 3. 教育制度と文筆家のアイデンティティ

本章では、文学活動というものを社会的動態として捉えたときに、いかなる基準あるいは等質性によって規定されているのが不明であり、主として個人的あるいは主観的なモチベーションに起因していると思われるような「文筆家のアイデンティティ」というものが、実際には、より大きな社会的領域と何らかの形で関連しあっているのではないかと、という可能性について考えてみようと思う。そういった領域の一例として、ここでは「学歴」を取り上げてみることにした。ただし、調査の実施

当初は中学・高校・専門学校・大学という細分化した区分を行なうことを予定していたものの、旧制の学校制度の状況を正確に把握することができなかつたため、今回は「大学以上」と「大学未満」という簡単な区分となっている。また旧制の高校以下、中学・女学校・師範学校は、ここでは便宜上すべて「大学未満」というグループに含まれている。「大学以上」と「大学未満」という区分はこういった手続き上の理由によるものであることをあらかじめ申し上げておきたい。また、両グループの比率は、対象者211名のうち「学校教育は受けていない」と「無回答」の計3名を除いて、「大学以上」は110人で52.9%、「大学未満」は98人で47.1%であった。さて、文筆家のアイデンティティを考えるにあたっては、この「学歴」と次の3つの質問に対する回答との関連性に注目した。1つは「一般に作家はどのような職業であると考えていますか」、2つめは「執筆を始めたきっかけは何ですか」、3つめは「執筆は現在、あなたにとってどのような意味を持っていますか」という設問である。このうち1つめは一般的な作家のイメージを尋ねるものであって、特に個人の文筆家としてのアイデンティティを問うものではないが、文筆活動を開始あるいは継続している自発的な要因、つまり「自分の文筆家としてのアイデンティティ」として本人があげているものが、実は「一般的な作家のイメージ」による影響と相互に関連しているという可能性もあるため設定されたものである。このように、内的な要素である「現在の執筆の意味」と外的な要素としての「作家のイメージ」、それに中間的な段階としての「執筆を開始したきっかけ」という3つの側面を眺め、これらを適宜比較していくことによって文筆家のアイデンティティの様相を捉えることができるのではないかと思う。そこでまず最初に、それぞれの設問に対する回答の割合を簡単に見ていくことにする。

[1] 一般に「作家」はどのような職業だとお考えですか？

	大学未満	大学以上	全体
書物、書くことが好きな人の職業	58(59.2%)	51(46.4%)	109(52.4%)
特別の才能が必要な職業	46(46.9%)	46(41.8%)	92(44.2%)
知識・教養・技術が必要な職業	36(36.7%)	48(43.6%)	84(40.4%)
文化的・芸術的な活動をする職業	43(43.9%)	40(36.4%)	83(39.9%)
時間的に束縛されない職業	23(23.5%)	26(23.6%)	49(23.6%)
社会的・倫理的な責任をともなう職業	25(25.5%)	22(20.0%)	47(22.6%)
収入とは無縁の職業	16(16.3%)	25(22.7%)	41(19.7%)
職業とは思わない	20(20.4%)	17(15.5%)	37(17.8%)
特に他の業種とは変わらない職業	12(12.2%)	16(14.6%)	28(13.5%)
道徳・社会規範を作る職業	6(6.1%)	2(1.8%)	8(3.8%)
社会的に高い地位をともなう職業	5(5.1%)	2(1.8%)	7(3.4%)
特殊な技術・知識が不要な職業	3(3.1%)	2(1.8%)	5(2.4%)
高収入を得られる職業	3(3.1%)	0(0.0%)	3(1.4%)
その他	2(2.0%)	13(11.8%)	15(7.2%)
全体	98(100%)	110(100%)	208(100%)

[表1]は「一般に作家はどのような職業であると考えていますか」という設問への回答と「学歴」との関係を表している。左側の数字はその選択肢を選んだ人の人数を、()の中の数字は各グループにおいてその人数が占めている割合をパーセンテージで表している。上から順に全体での回答者の割合が多いものから並んでいる。大学未満のグループでは、「特別の才能が必要」「文化的・芸術的な活動をする」「社会的・倫理的な責任を伴う」「道徳・社会規範を作る」「社会的に高い地位を伴う」「高収入を得られる」などの選択肢で大学以上のグループよりも高く、逆に「収入とは無縁」という

選択肢では低いことが分かる。

次の[表2]は「執筆を始めたきっかけは何ですか」という設問への回答と「学歴」との関係を示している。構成は[表1]と同じである。

[2] 執筆を始めたきっかけは何ですか？

	大学未満	大学以上	全体
文章を書くことが好きなので	77(78.6%)	64(58.7%)	141(68.1%)
文章を書くという芸術的な活動に魅力を感じた	35(35.7%)	44(40.4%)	79(38.2%)
自分の人生について書きたかった	33(33.7%)	29(26.6%)	62(30.0%)
ひとつの余暇の過ごし方だと思った	27(27.6%)	26(23.9%)	53(25.6%)
感動する本を読み同じような作品を書きたいと思った	21(21.4%)	29(26.6%)	50(24.2%)
社会的・政治的な問題を世の中に提起するため	13(13.3%)	20(18.4%)	33(15.9%)
倫理的・道徳的な問題を世の中に提起するため	13(13.3%)	14(12.8%)	27(13.0%)
特殊な技術・知識・道具が必要なかった	8(8.2%)	10(9.2%)	18(8.7%)
文章を書く才能があると思った	9(9.2%)	5(4.6%)	14(6.8%)
尊敬する作家がいてその人になりたいと思った	6(6.1%)	6(5.5%)	12(5.8%)
作家という社会的な地位に憧れた	1(1.0%)	3(2.8%)	4(1.9%)
作家になれば有名になると思った	1(1.0%)	0(0.0%)	1(0.5%)
文学賞の賞金が魅力的だった	1(1.0%)	0(0.0%)	1(0.5%)
作家は経済的に魅力のある職業だと考えた	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)
その他	18(18.4%)	36(33.0%)	54(26.1%)
全体	98(100%)	109(100%)	207(100%)

一覧すると、大学未満のグループは、「文章を書くことが好きなので」「自分の人生について書きたかった」「1つの余暇の過ごし方だと思った」「文章を書く才能があると思った」という選択肢が高くなっているのに対して、大学以上のグループは、「文章を書くという文化的・芸術的な活動に魅力を感じた」「感動する本を読んで同じような作品を書きたいと思った」「社会的・政治的問題を執筆を通じて世の中に提起するため」という選択肢が高くなっている。収入など経済的な面についてはどちらもほとんど回答者がいない。

次の[表3]は「執筆は現在、あなたにとってどのような意味を持っていますか」という設問への回答と「学歴」との関係を示している。

[3] 執筆活動は、あなたにとって現在どのような意味を持っていますか？

	大学未満	大学以上	全体
書くことが楽しい	48(49.9%)	48(44.0%)	96(46.6%)
文化的・芸術的な活動をしているという充実感を得る	33(34.0%)	45(41.3%)	78(37.9%)
生きがい	39(40.2%)	35(32.1%)	74(35.9%)
自分の人生を記録する	33(34.0%)	39(35.8%)	72(35.0%)
ひとつの余暇の過ごし方・たんなる趣味	26(26.8%)	22(20.2%)	48(23.3%)
社会的・政治的な問題を提起する	13(13.4%)	18(16.5%)	31(15.0%)
倫理的・道徳的な問題を提起する	8(8.3%)	15(13.8%)	23(11.2%)
収入を得る	5(5.2%)	17(15.6%)	22(10.7%)
社会的・文化的な名声を得る	0(0.0%)	4(3.7%)	4(1.9%)
その他	23(23.7%)	27(24.8%)	50(24.3%)
全体	97(100%)	109(100%)	206(100%)

大学未満のグループの方が高いのは、「書くことが楽しいから」「生き甲斐」「1つの余暇の過ごし方・単なる趣味」という選択肢であり、一方、大学以上のグループの方が高くなっているのは、「文化的・芸術的な活動をしているという充実感を得る」「社会的・政治的な問題を提起する」「倫理

的・道徳的な問題を提起する」「収入を得る」「社会的・文化的な名声を得る」となっている。3つの設問における傾向の違いを通して見たわけだが、それをまとめると次のようなことが推測できるであろう：

1. 「作家の職業イメージ」では大学未満のグループの方が職業性、社会・公共性、文化・芸術性の高い作像、つまり、いわゆる専業の作家、職業作家のようなものを想定しているようである。
2. 「執筆を開始したきっかけ」では、大学以上のグループの方が文化的・芸術的な要因、社会・公共的な要因が強いようである。
3. 「現在の執筆の意味」では、大学以上のグループの方が職業性、文化・芸術性、社会・公共的な要因が多少強く、大学未満のグループの方はそれほどでもないようである。

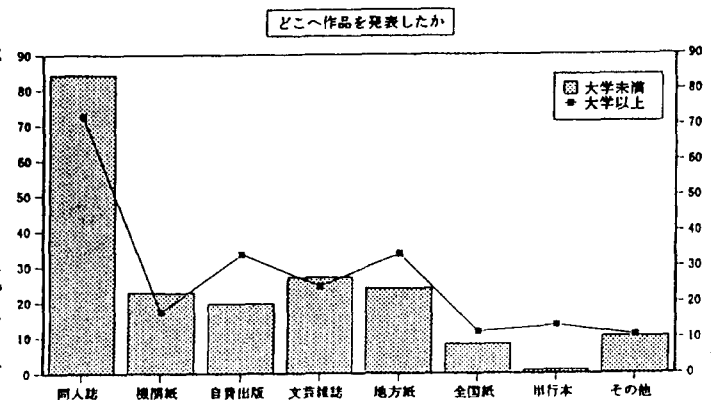
つまり、大学未満のグループの方が「一般的な作家の職業のイメージ」と「自身の現在の執筆の意味」の間に開きがあり、一方、大学以上の方はそれほどでもない、ということである。この点について、別の資料を用いてももう少し詳しく見ていこうと思う。

グラフ[4]は「どこから文学的な刺激や [4]

影響を受けますか」という設問に対する回答と「学歴」との関係を示している。差があるところを見ると、「文芸雑誌」及び「同人・同人誌」において、大学未満のグループが大学以上のグループの2倍近くになっている。逆に大学以上の方が高くなっているところを見ると、「文学以外の表現メディア」（映画・絵画・音楽・コミック・アニメ）、これと「マスメディア」（テレビ・ラジオ・新聞・報道）、それに「文学関係以外の知識人」となっている。こう

いった違いから、大学未満のグループは文学と位置付けられるような領域に刺激や影響源をより多く見ているのに対して、大学以上のグループでは文学以外の領域からも積極的に刺激を受けていると推測される。

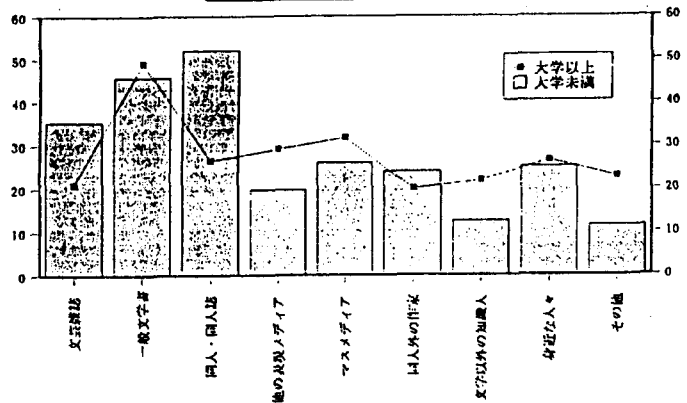
またグラフ[5]は「どこに作品を発表しましたか」という設問に対する回答と「学歴」との関係を示している。大学未満のグループは「同人誌」と「サークルなどの機関紙」でやや高くなっているが、これに対して大学以上のグループは「自費出版の本や雑誌」「地方誌」「全国紙」それから「単行本」という選択肢で高い数値を示している。ちなみに同人などの団体に所属している割合は大学未満のグループの方が高く86.7%、大学以上のグループは79.1%という結果が出ている。こういった



作品発表先の違いから、大学未満のグループは比較的身近な領域で作品を発表することの方が多く、一方それと比べると大学以上グループは公共性の高いところにも発表の機会を持つことが多いのではないと思われる。さて、こういった資料を見たあとでさきほどの予測をもう一度考えてみると、大学以上のグループというのは大学未満のグループが想定していると思われる「**専業作家のイメージ**」に多少近い活動形態を有しており、またそのような活動をしているという意識も持っているのではない

[5]

どこから文学的な影響をよく受けるか



かと思われる。それは例えば現在の執筆の意味」として「収入を得る」や「社会的・文化的な名声を得る」と回答している人がいたことから推測できる。大学未満のグループと比べて「社会的・政治的な問題を提起する」という選択肢が高い数値を示しており、また文学以外の領域から影響を受ける割合が多いことや、公共性の高いところに発表する機会が多いのも大学以上のグループであった。これに対して大学未満のグループは商業性や公共性よりも、どちらかという身近な領域での活動、という意識を持っているのではないと思われる。「書くことが好きなので」始めた、という選択肢を選んだ割合が他と比べてきわめて多いことや、「現在の執筆の意味」は「生き甲斐」であると回答した割合が大学以上のグループよりも多かったこと、また大学以上のグループと比べて「問題を提起する」という要因が低く「趣味あるいは余暇」という回答が多かったことなどは、この推測を裏付けているといえるであろう。今回使用した資料はわずかなものであったが、それでも大学未満のグループと大学以上のグループの間で「**文筆家としてのアイデンティティ**」という点に関して異なった傾向が見られること、つまり「アイデンティティ」という一見個人的であるように思われるものが、実は「**学歴**」という、より一般的な要因とも何らかの形で関連しあって変動している、ということを示せたのではないと思う。おそらくもっと絞り込んだデータの収集と分析を、例えば学校教育の内実に関する調査や、都市部と地方との情報量の格差などに関する調査といった形で行えば、「**文筆家・作家のアイデンティティ**」や「**作家という職業のイメージ**」が伴っている諸要因について、またそういったものが社会的に形成されていく過程について、より詳しい関係を見ることができよう。これらの諸問題については、今後の研究において取り扱っていく予定である。 (文責：前原)

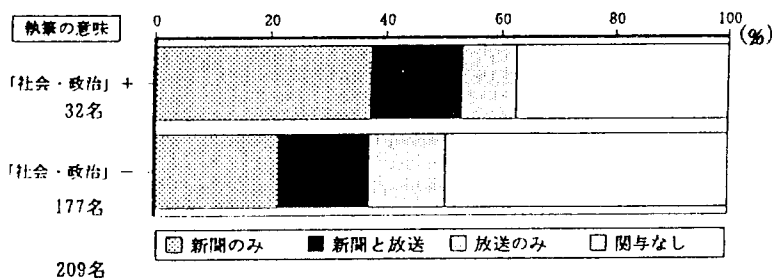
#### 4. メディアへの関わり方

ここでは、アイデンティティに対するマクロな領域として、文筆家の活動展開に注目したい。この

点に関しては、「執筆は現在、あなたにとってどのような意味を持っていますか」でアイデンティティのタイプ分けをし、「テレビ局/ラジオ局/新聞社と関わったことがありますか」で各々の活動展開を見ていくことにする。

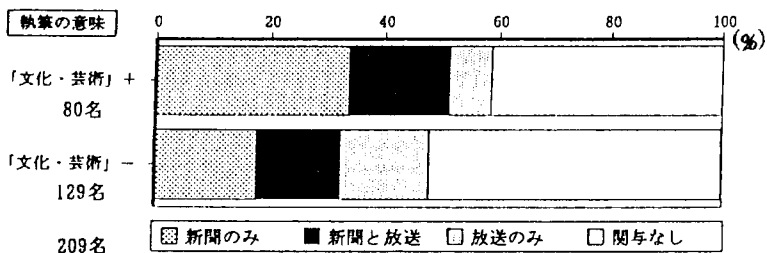
「社会的・政治的な問題を提起する」あるいは「文化的・芸術的な活動をしている、という充実感を得る」という選択肢を選んでいる場合は、社会に対する関心が高いアイデンティティ形成が見られると考えられるが、どちらも下のグラフのようにになっている。

[6] 「社会・政治」+/-とマスメディアのグラフ



- \* 「社会・政治」+：「社会的・政治的な問題を提起する」という意味づけをしている。
- \* 「社会・政治」-：「社会的・政治的な問題を提起する」という意味づけをしていない。
- \* 「新聞のみ」：新聞にのみ関わったことがある。
- \* 「新聞と放送」：新聞に関わったことがある、かつテレビ又はラジオにも関わったことがある。
- \* 「放送のみ」：テレビ又はラジオに関わったことがある、新聞には関わったことがない。
- \* 「関与なし」：テレビにもラジオにも新聞にも関わったことがない。

[7] 「文化・芸術」+/-とマスメディアのグラフ

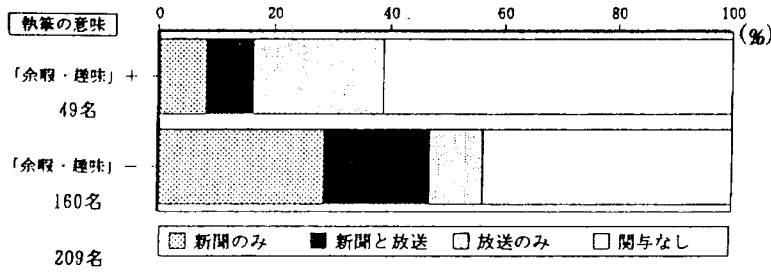


- \* 「文化・芸術」+：「文化的・芸術的な活動をしている、という充実感を得る」という意味づけをしている。
- \* 「文化・芸術」-：「文化的・芸術的な活動をしている、という充実感を得る」という意味づけをしていない。

「社会・政治+」や「文化・芸術+」は「社会・政治-」、「文化・芸術-」に比べて全体にマスメディアに関わっている割合が高く、特に新聞に関わっている人（「新聞のみ」、「新聞と放送」）が多いのがわかる。アイデンティティの面で社会的な関心を示している場合、活動範囲はより広がっており、またマスメディアの中でも新聞が特に重要なものになっていることが予想できる。

一方、執筆活動は「ひとつの余暇の過ごし方・単なる趣味」であるという、個人的な活動に重点を置いたアイデンティティ形成が見られる場合、グラフは次のようになっている。

[8] 「余暇・趣味」＋／－とマスメディアのグラフ



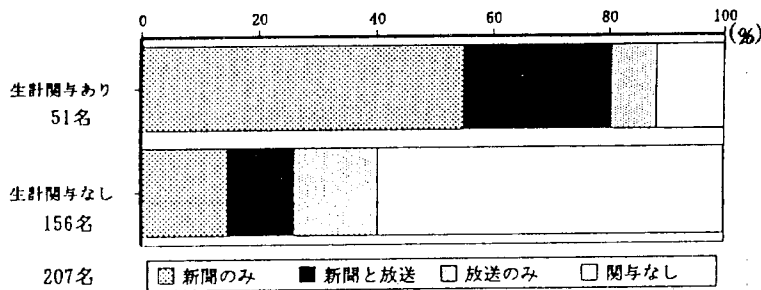
\* 「余暇・趣味」＋：「ひとつの余暇の過ごし方・単なる趣味」という意味づけをしている。  
 \* 「余暇・趣味」－：「ひとつの余暇の過ごし方・単なる趣味」という意味づけをしていない。

「余暇・趣味＋」では、マスメディアに関わっている割合が低くなり、その中でも新聞に関わっている割合はずっと低くなっている。個人的な活動を重視する場合には、活動の領域をマスメディアへと広げていくことがあまり重要ではないことが予想できる。

以上のことから、社会的・公共的な関心が低い場合、マスメディアに活動の領域を広げていくことはあまりないようである。一方、このような意識が高い場合、マスメディアに関わる割合が高くなり、その中でも作品発表や批評の場を多く提供してくれる新聞が重要な位置を占めている。

経済的な要因も活動のしかたに関わっていると考えられる。「文筆活動と生計の関係はどのようになっていますか」について、「執筆による収入が生計に関わっている」人と「執筆と生計は無関係」という人に分け、マスメディア関与との相関性を見ていくことにする。

[9] 生計関与とマスメディアのグラフ



\* 「生計関与あり」：執筆による収入が多少にかかわらず生計に関わっている。  
 \* 「生計関与なし」：執筆と生計は無関係。

「生計関与あり」ではマスメディアに関わっている割合が圧倒的に高く、その大部分が新聞に関係していることがわかる。新聞がテレビ、ラジオよりも機会を多く提供し、より確実な収入源となっていることが予想できる。一方、「生計関与なし」という方は全体にマスメディアに関わっている割合が低く、特に新聞が高いという傾向も見られない。

まとめ：社会的・公共的な関心が高いと、作品が多くの人に目に触れやすいマスメディアに関わる割合が高くなる。マスメディアに関わると当然収入も期待できるようになるだろう。執筆活動が生計

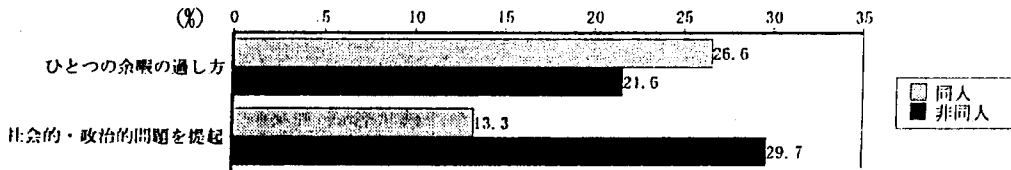
に関わるとなれば、収入の機会を求めてさらに活動の範囲も広がっていきと考えられる。社会的・公共的関心が低いと、マスメディアには手を広げない形で活動を展開している傾向が見られる。当然そこからの収入は小さく、収入に対する期待もさほど高くはないと考えられる。この場合にはむしろ個人的な、あるいはごく限られた領域に強い関心を示すアイデンティティが形成されているようである。  
(文責：岡田)

### 5. 同人所属と文筆活動の関係

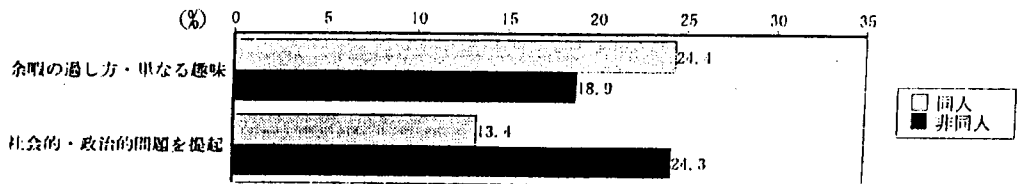
ここでは、同人などの団体に所属していることが、文筆家のアイデンティティ形成と活動形態にどのように反映しているのかについて考察する。便宜上、アンケートの「文芸サークル・同人などの団体に所属されていますか?」という設問に対して「所属している」と回答した174名を「同人」、「所属していない」と回答した27名と「以前は所属していたが、現在は所属していない」と回答した10名を合わせた37名を「非同人」として、各設問の回答を同人と非同人とに分け、その傾向を見た。

まず、文筆家のアイデンティティ形成について、「執筆を始められたきっかけは何ですか?」と「執筆活動は、あなたにとって現在どのような意味を持っていますか?」の2つの設問に表れた傾向を見る。下の[10][11]のグラフでは、「余暇・趣味」「社会的・政治的な問題提起」という選択肢を取り出している。これらの選択肢を両方選んだ人はどちらの設問でもひとりもおらず、2つの選択肢は互いに排除し合っている。「社会的・政治的な問題提起」は社会に対する関心を強く表す選択肢だが、これに対して「余暇・趣味」は社会的な関心とは関係のない傾向を示す選択肢である。

[10] 「執筆を始められたきっかけは何ですか?」



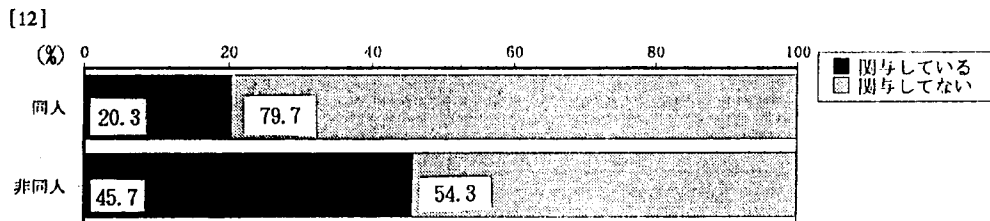
[11] 「執筆活動は、あなたにとって現在どのような意味を持っていますか?」



[10][11]のグラフのどちらの場合でも、同人は社会的な関心の低い傾向があり、非同人は社会的な関心の高い傾向がある。この違いは、執筆活動を始めた頃から現在に至るまで観察され、非同人のほうが文筆活動に、より公共的な性格を求めているようだ。

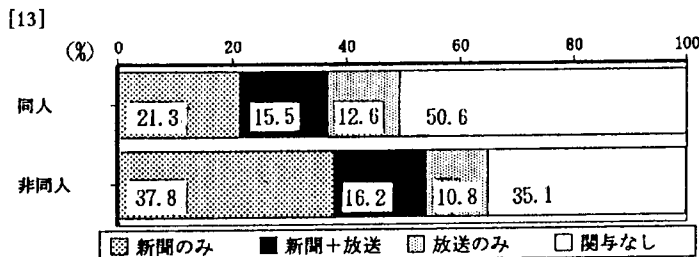
次に収入と活動形態について。この設問で「収入を得るため」と答えたのは、非同人で24.3%、同人では7.6%となっていて、その差は顕著だった。

グラフ [12] は、「あなたの文筆活動と生計の関係はどのようになっていますか？」の4つの選択肢を、文筆活動が生計に関与しているかいないかという2つにまとめている。



生計に関与しているのは、同人では2割にすぎないが、非同人では半数近くにのぼっている。

また、グラフ [13] は、マスメディアとの関わりを示しているが、ここでも収入に関する傾向を読み取ることができる。



マスメディアに関わっていないのは、非同人ではそれほど多くないが、同人で半数にのぼる。さらに、原稿料として収入が確実に入る新聞の場合は、非同人のほうが関わる割合が高くなっている。

全体として、非同人は、文筆活動を生計収入と結びつけている傾向が見られ、同人は、さほど結びつけない傾向がある。

同人に属さない文筆家は、自分の作品を活字として出す場合（文学賞入選というケースを除くと）、おのずと作品を商業ベースに乗せ、不特定多数の読者を相手にすることになるだろう。収入を期待するなら、文筆家にとっては売れ行きや読者、マスコミ、批評家などの反応が無視できない要因

になるはずだ。非同人の文筆活動の公共的な性格や生計収入との関わりは、こういう点から容易に理解できる。

これに対して、同人の場合、文筆活動が生計収入とあまり結びついていない点を考えると、同人の活動は経済性や商業性とは結びつきにくい面をもっており、したがって、プロの文筆家を生み出す母体としての機能は比較的弱いようだ。

その反面、同人は団体に属することで、すでに作品発表の場を確保している。さらに、同人はメンバー同士が、お互いに読者や批評家の役割も担っていると思われる（同人の会合については（設問37）、「作品の合評会」というのがもっとも多い回答だった）。いわば、同人という団体はそれ自体が「作品を書いて発表する」側面と「作品を読んで批評する」側面の両方をもっており、小規模ながら公共的な機能を備えていると考えられる。一般には閉鎖的、趣味的と思われがちな同人団体も、こうした観点から見ると、限定されているとはいえ、ある程度社会的な広がりをもった活動とみなすことができるだろう。

（文責：小川）

## 6. 助成と文学賞

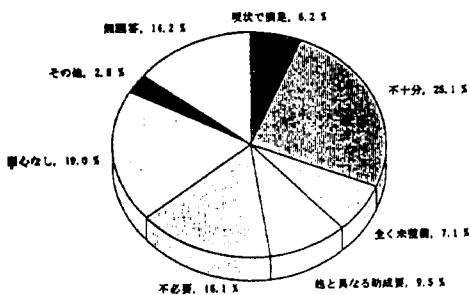
本節では、文筆活動に対する社会的次元でのほたらきかけとしての助成や文学賞が、札幌圏の文学システムにおいていかなる役割を果たし、またいかなる形で、どの程度システムに定着しているのかについて、ドイツの実情を交えながら述べたい。一口に助成といっても、その主体、対象、手段により様々な形態が存在し得るのは言うまでもないが、日独比較を念頭に置いた今回の調査では「作家に対する自治体や企業の経済的支援」に分析の主眼を置いた点を初めに断っておく。

### 6-1 助成経験と助成観

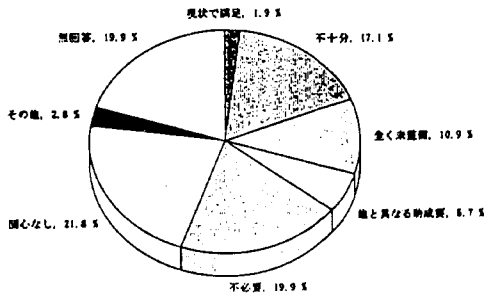
文筆活動において助成を受けた経験のない人が圧倒的に多く（83.3%）、そもそも助成について知らない人も4人に1人の割合（25.3%）でいたのに対し、公的助成、企業による助成を受けた文筆家はそれぞれ8名（4.0%）、3名（1.5%）のみであった（複数回答制につき合計は100%を超える）。なお、公的助成受給者のうち6名までが社会教育事業の一環としての助成を市教育委員会から得ているが、その殆どは同人誌や団体を対象にしたものである。他方、企業による助成の内訳は、地方新聞社、地方銀行、芸術団体から各1名となっている。因みに、電通総研が職業芸術家を対象に実施した全国調査<sup>12)</sup>を見ても、「助成経験がない」の回答が最も多い分野が文芸（78%）で、最も少ない音楽（48%）とは大きな差がある。職業作家であるか否かを問わず、日本では文学は助成とは縁が薄い。では、札幌圏の文筆家はどのような助成観をもっているのだろうか。

[14]

札幌圏の公的助成に対する考え



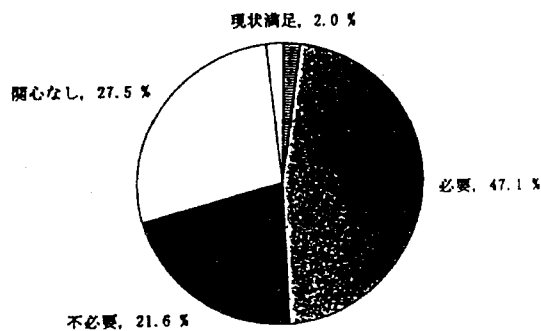
札幌圏の企業による助成に対する考え



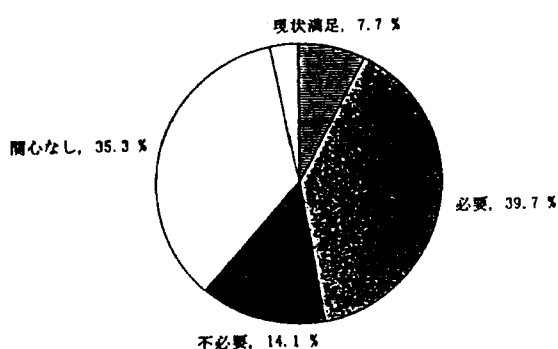
グラフ[14]は札幌圏の公的助成並びに企業による助成に対する考えを表したものである。なお、他の設問と比べて顕著に多かった「無回答」も含まれている。これを見ると「現状に満足」が少なく、「不十分」、「不必要」、「関心なし」、「無回答」がかなりばらけている点が両者に共通している。特に「不必要」、「関心なし」、「無回答」等の否定的意見が目立つ。先の電通総研の調査でも「助成は不必要」の回答が最も多かった分野が文芸であった。プロとアマを問わず一般に文筆家のシビアな助成観は、助成なしでも創作や発表の場が確保されている現状から、ある程度説明できるかもしれない。

ここで話を単純化するため、「不十分」、「全く整備されていない」、「他の分野とは異なる助成が必要」の3つを「必要」に、更に「関心がない」と「無回答」を「関心なし」に、それぞれカテゴリーを組み換えてみると、逆転現象が生じて興味深い。即ち「必要」は公的助成(41.7%)が企業の助成(33.7%)を上回っているが、逆に「関心なし」は前者(33.2%)より後者(41.7%)の方が高い。「不必要」という意見も僅かだが公的助成の方が低いことから、全体としては企業よりも公的助成への期待がより高いと解釈できる。

[15] 文筆活動が生計に關与する人(51人)



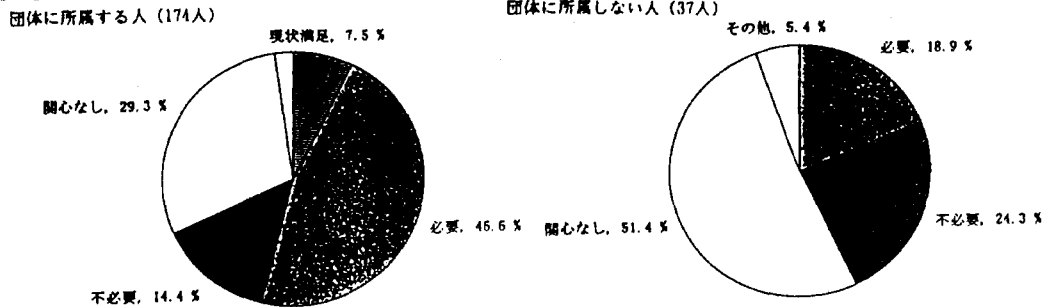
文筆活動と生計が無関係の人(156人)



次に、カテゴリーを組み換えたまま、特に公的助成に対する考えと他の項目との関連性を別の角度から見たい。まず「文筆活動と生計との関与」との関わり(グラフ[15])だが、文筆活動が生計に

与する人は経済的側面に対する意識も高いと予想されるので、生計に関与しない人より「関心なし」が低いのは分かる。その分「必要」も「不必要」も多いことから、文筆活動が生計に関与する人の方が「必要」にせよ「不必要」にせよ、助成に対してより明確な意見をもつ傾向がある。また「サークルや同人への所属の有無」との関連性では、対照的な結果が得られた（グラフ[16]）。

[16]



団体非所属者では「関心なし」が半数を超え、「必要」より「不必要」が多いのに対し、団体所属者は「関心なし」が低く、「必要」は「不必要」の3倍以上もいる。団体所属者のこうした好意的な助成観は、原則として団体を対象とした公的助成のありかとも関連しているだろう。因みに今回の調査で助成を受けたと回答した文筆家はすべて団体所属者であった。

## 6-2 助成と文化政策—日独比較

自治体の芸術文化支援は近年特に盛んだが、文化行政の基本理念は大きく変化していないように思われる。つまり、施設にせよ、コンクールにせよ、芸術鑑賞の機会にせよ、自治体が最優先するのは<市民に対する公平・平等性>の原則に他ならない。ただ、聞き取り調査を通じて痛感したが、札幌圏の場合、道、市、支庁という風に、更にとどの行政単位においても、生涯学習課、教育委員会、文化振興課、市民課という風に、文化行政の担当部署が二重に分散しているうえ、それらを統轄する部局がない。また、文学助成について明確な指針や長期的展望といったものも自治体の側から見えてこない。更に、日本では職業芸術家の大都市集中が顕著だが、なかでも文筆家の集中度が最も高い<sup>13)</sup>。それだけ地方には職業作家は少ないが、彼らの文筆家としてのアイデンティティは実際非常に多様であって、公平・平等性という行政側の原則とは反りが合わない部分が当然出てくる。このように考えると、本調査で見られた公的助成に対する否定的な意見認知の低さは、何よりも自治体と作家との間のコミュニケーションの希薄さを示唆しているのではないかと考えられる。

ドイツに目を向けると、ナチズムの反省から、国ではなく州や市町村が文化支援を担っている点が最大の特徴である。企業のメセナも増えてはいるが全体的にはまだ弱く、助成の主導権は自治体（正確にはそのなかの文化局）が握っている。重要なのは、創作過程に援助を与えることで職業芸術家の労働条件を改善し、かつ芸術文化を低料金で市民に提供するのは自治体の義務だと考えられている点

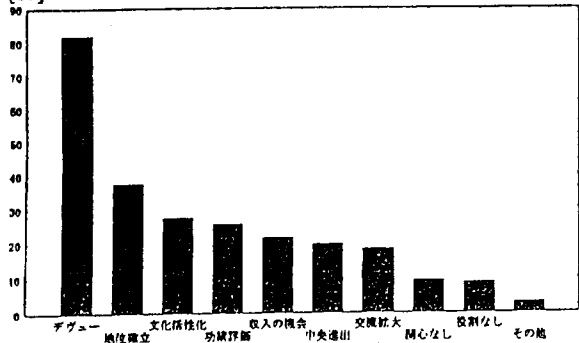
である。芸術文化振興に充てられる公的予算全体を見ると、ドイツでも音楽や劇場が圧倒的に多く、文学への助成は1%未満だが、今述べた助成の基本理念は文学にも浸透している。その端的な例が文学賞で、主立った150余りの賞の約半分は自治体が主催している。非営利組織（財団や基金）が約4割とこれに続き、民間メディアが主催する賞は1割に過ぎない。既に地位を確立した作家に贈られるメジャーな賞もドイツでは少なからず自治体が主催しているが、他方、年齢制限を設けた若手作家への奨励賞も全体の4分の1を占める。これから書こうとする作品執筆のための奨励金制度や、作家による自作朗読会も自治体の重要な文学助成措置である。勿論、行政主導型の助成には、政治的利害が絡んで武ья金が特定組織に偏りやすいといった配分の問題や、州による助成規模の格差問題も指摘されているが、作家の側から助成そのものを否定する声は殆どない<sup>14)</sup>。

### 6-3 文学賞

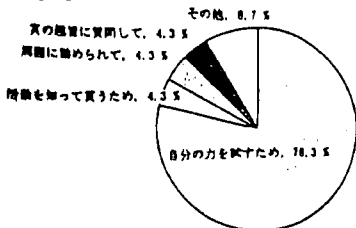
公的助成としての機能も合わせもったドイツの文学賞とは異なり、日本で強い影響力をもってきた中央の出版社による文学賞は、受賞後の版權問題や作家の囲い込みに見られるように、明らかに出版社の利害で動いており、助成とは言い難い。また平成以後の自治体による文学賞創設ラッシュも、中央の著名な作家を選考委員に招いたり、賞金を増やすなど話題作りが常に先行し、助成というよりは寧ろ文化支援を兼ねた手軽な地域振興事業に近い。

札幌での調査に戻ろう。グラフ[17]は、一般に文学賞が果たしている役割（「本人にとって賞がもつ意味」ではない）を複数回答制で尋ねたものだが、「新人にデビューのチャンスを与える」が群を抜いて高い。かなり差はあるが「作家としての地位を確立する」という回答も4割近いことから、中央のメディアによる著名な賞を念頭に置いた回答者が多いのではないかと推測される。あとは横一線だが、「関心がない」や「特に大きな役割はない」は共に1割に満たない。因みに札幌の文筆家の半数が応募または受賞経験をもつことも考え合わせると、助成とは対照的に文学賞に対する認知の高さや肯定的な評価が指摘できる。本調査において応募の多かった文学賞の主権者を三つ順に挙げると、「地方の新聞・雑誌」が36名、「札幌圏の自治体」15が25名、「大手出版社」が21名で、地域指向が強いのが特徴である。更にこれらの賞の応募動機や受賞後の生活上の変化を比較した場合、賞による傾向の差が確認できた。まず応募動機(グラフ[18]-[20])

[17] (複数回答、縦軸：%)

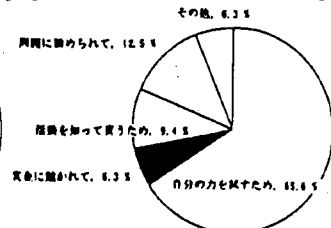


[18]



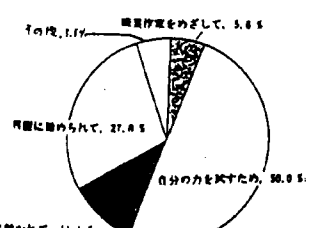
札幌圏自治体の文学賞応募者 (無回答2を除く23人)

[19]



地方の新聞・雑誌主催の文学賞応募者 (無回答4を除く32人)

[20]



大手出版社主催の文学賞応募者 (無回答3を除く18人)

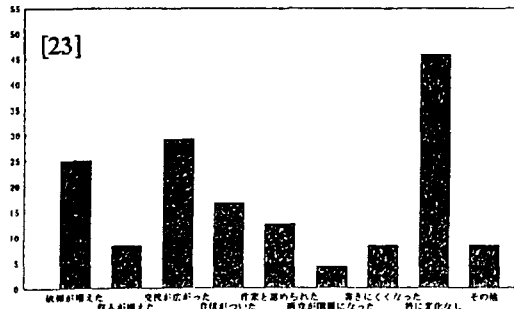
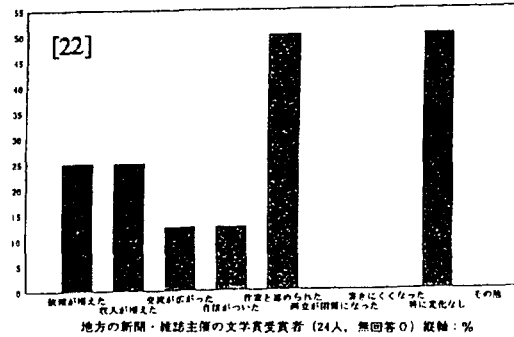
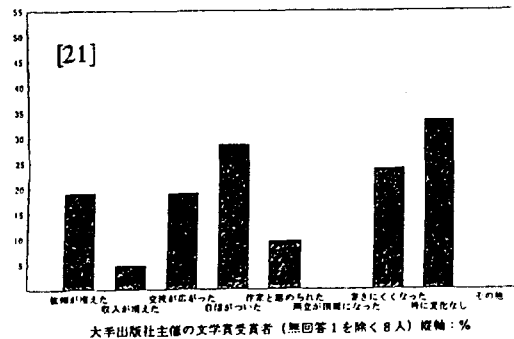
では、どの賞でも「力試し」が過半数を占めている。自治体主催の賞ではこれが特に高い反面、「周囲に薦められて」や「自分の活動を知ってもらうため」がかなり少ない。この賞の応募者が執筆活動を自ら「余暇」に位置づけている割合も他の二つの賞の倍もあることから、この賞には個人的な余暇のレベルで応募する作家が多いと言える。対照的に大手出版社主催の賞では、僅かながら「本格的作家を目指して」や「賞金に魅かれて」という回答も見られる。目立って多いのは「周囲に勧められて」で、この賞に応募に際しては周囲の評価も重要な要因になっている点が興味深い。地方の新聞・雑誌の賞については難しいが、ここでも「活動を知ってもらう」や「周囲に勧められて」といった、外部との接触が動機として無視できないうえ、自分の執筆活動を余暇と位置づける人も少ないことから、その性格は両者の中間というより寧ろ大手出版社の賞に近い。

受賞後の生活上の変化(グラフ[21]~[23])では、大手出版社の文学賞受賞者が少ないため、データとしての信頼度にやや欠けるが、興味深い結果が得られた。「特に変化が見られなかった」という回答がどの賞でも一番多いが、次に多い回答を見ると、自治体の賞では「自信がついた」、地方の新聞・雑誌の賞では「交流が増えた」、大手出版社の賞では「作家とみなされるようになった」というように、賞によって異なっている。既に示した各賞の応募動機とこれらの受賞後の生活変化を照らし合わせてみると、両者のあいだには緩やかながら一定の関連性が認められる。

#### 6-4 総括

以上、札幌圏の文筆家の、助成や文学賞に対する意識ならびに関与の実態について分析してきたが、システムへの定着度に関して明確に確認された、国のレベルと札幌圏という地域レベルとでの、さらに助成と文学賞とでの、共通点や相違点を最後にまとめておきたい。作家の職業的・経済的条件の改善のために、換言すれば広い意味での社会福祉政策として作家への助成を行っているドイツ

札幌圏自治体主催の文学賞受賞者（無回答2を除く21人）縦軸：%



に対し、札幌圏自治体による助成は、市民に対する公平・平等性の基本原則に基づき、社会教育の枠組みのなかで、しかし明確な指針をもたないまま行われている。他方、職業作家としてのリスクを改めて負わない文筆家には、経済的負担の比較的小さい同人誌や、地方新聞など地域に密着したメディア発表の受け皿として確保されている。こうした点も、公的助成の認知が低い間接的な要因として考慮する必要がある。また文学賞について言えば、札幌圏の文筆家は、イメージとしては大手出版社の賞を強烈にもちながらも、実際の関与のレベルでは各々文筆家としてのアイデンティティに沿って賞を選び、そしてそれが受賞後の変化にも結びついている、つまりインプットとアウトプットのフィードバックがある程度機能している。裏を返せば、文学賞の選択肢にそれだけ幅があるということだが、こうしたことが、助成とは異なり、文学賞のシステムへの定着度の高さにつながっているものと考えられる。

(文責：中瀬)

#### 参考文献

- Bourdieu, P. (1991): Questions of method, in: Ibsch, E. a. o. (ed.) (1991): Empirical Studies of Literature: Proceedings of the Second IGEL-Conference, Amsterdam 1989. 19-36.
- Bourdieu, P., van Rees, K., Schmidt, S.J. & Verdaasdonk, H. (1991): The structure of the literary field and the homogeneity of cultural choices, in: Ibsch, E. a. o. (ed.) (1991): Empirical Studies of Literature: Proceedings of the Second IGEL-Conference, Amsterdam 1989. 427-443.
- Fohrbeck, K. & Wiesand, A.J. (1972): Der Autorenreport. Hamburg.
- Funk, H. & Wittmann, G.R. (1983): Literatur Hauptstadt. Schriftsteller in Berlin heute. Berlin.
- Hejl, P.M. (1987): Konstruktion der sozialen Konstruktion: Grundlinien einer konstruktivistischen Sozialtheorie, in: Schmidt, S.J. (1987): Der Diskurs des Radikalen Konstruktivismus. Frankfurt a. M. 303-339.
- Kudrnofsky, W. (1973): Zur Lage des Österreichischen Schriftstellers. Wien / Europa Verlag.
- Luhmann, N. (1995): Die Kunst der Gesellschaft. Frankfurt a. M.
- Luhmann, N. (1988): Medium und Organisation, in: Luhmann, N. (1988): Die Wirtschaft der Gesellschaft. Frankfurt a. M. / Suhrkamp. 302-323.
- Luhmann, N. (1987): Soziale Systeme. Grundriß einer allgemeinen Theorie. Frankfurt a. M.
- Luhmann, N. (1981): Ist Kunst codierbar? in: Luhmann, N. (1981): soziologische Aufklärung 3. Opladen, 245-266.
- Rusch, G. (1991): Zur Systemtheorie und Phänomenologie von Literatur, in: SPIEL 10, H.2, 301-335.
- Rusch, G. und Schmidt, S.J. (1983): Das Voraussetzungs-system Georg Trakls, Braunschweig/Wiesbaden.
- Schmidt, S.J. (1991): Grundriß der Empirischen Literaturwissenschaft (Taschenbuchausgabe). Frankfurt a. M.
- Schmidt, S.J. (1989): Die Selbstorganisation des Sozialsystems Literatur im 18. Jahrhundert. Frankfurt a. M.
- Wiesand, A.J. u. a. (1980): Literaturförderung im internationalen Vergleich. Ein Bericht über Förderformen, Literatur-Fonds und Beispiele praktischer Unterstützung des literarischen Lebens. Köln.
- Wittmann, G.R. (1983): Die Schriftsteller und das literarische Kräftefeld. In: Funk, H. & H. Wittmann, G.R. (1983): Literatur Hauptstadt. Schriftsteller in Berlin heute. Berlin. 31-368.
- I. ウォーラーステイン (1993) : 『脱=社会学』藤原書店
- P. ブルデュー (1995/96) : 『芸術の規則 (上/下)』藤原書店
- P. ブルデュー (1990) : 『ティスタンクシオン (上/下)』藤原書店
- 札幌市 (1990-94) : 『札幌芸術文化年鑑』
- 札幌市民芸術祭芸術委員会 (編) (1994) 『さっぽろ市民文芸』第11号
- 社団法人企業メセナ協議会 (編) (1994) : 『メセナ白書1994』ダイヤモンド社
- 池上博 (編) (1991) : 『文化経済学の可能性—文化政策と舞台芸術の現状と未来』芸団協出版部
- 電通総研 (1993) : 『我が国の文化の動向に関する調査』電通総研

#### 注

- 1) この点で、経験的文学研究などの動向の外部から出てきた研究ではあるが、文学システム概念を作家の経験的調査に唯一利用したもとして、Wittmann, G.R. (1983)の研究は重要である。しかし、その調査においても、ルーマンやブルデューなどの考察を列挙した理論設定の部分と実際のアンケート調査の部分とがうまくリンクしていないという印象を受ける。
- 2) Rusch, G. (1991)を参照。
- 3) Schmidt, S.J. (1989), Schmidt, S.J. (1991)を参照。
- 4) Rusch, G. (1991)を参照。
- 5) Luhmann, N. (1995), Luhmann, N. (1988), Luhmann, N. (1987), Luhmann, N. (1981)を参照。
- 6) ウォーラーステイン (1993)を参照。
- 7) 社会システムの交点として個人を捉える点に関しては、Hejl, P. (1987)を参照。
- 8) Rusch, G. und Schmidt, S.J. (1983)を参照。
- 9), 10), 11) 文献表を参照。
- 12) 電通総研編 : 『我が国の文化の動向に関する調査』1993, 201頁。
- 13) 池上博編 : 『文化経済学の可能性』1991, 74頁。
- 14) Funk, H./ Wittmann, G.R. : Literatur Hauptstadt. Schriftsteller in Berlin. Berlin, 1983. S.305f.  
Kudrnofsky, W.: Zur Lage des österreichischen Schriftstellers. Wien, 1973. S.221-237.
- 15) 札幌市が市民芸術祭の一環として市民を対象に毎年実施している『さっぽろ市民文芸』に掲載されたものを主に指す。賞金は出ないが、掲載作品の一部に賞が与えられる。